

会派研修報告書

会派で実施した研修会の結果について、下記のとおり報告します。

平成28年 8月 8日

光市議会議長 中村賢道 様

光市議会会派 為光会 磯部 登志恵
笹井 琢
木村 則夫

1 研修会日時 平成28年7月30日(土) 13時30分～15時

2 研修会場所 室積コミュニティセンター(大ホール)

3 研修会テーマ

都市史・建築史からみた港町室積 室積の歴史パネル展示

4 研修会講師 赤松 悟(NPO法人都市・建築遺産保存線機構理事)

5 研修会結果 参加者 150名
内容は別紙研修会報告書のとおり

6 添付資料 チラシ
アンケート集計結果(37通)
新聞記事

光市議会会派「為光会」研修会報告書

日時	平成28年 7月30日(水) 13時30分～15時
会場	室積コミュニティセンター(大ホール)
講師	赤松 悟(NPO法人都市・建築遺産保存線機構理事)
テーマ	都市史・建築史から見た港町室積 室積の歴史パネル展示



研修会の経緯

普賢寺今昔市や着物でぶらりなど風情あるイベントが行われている室積地区であるが、歴史的な建築物は年々減少している。24年前に室積地区で行われた九州芸工大建築物調査チームの構成員であった赤松悟先生と連絡を取ることができ、上記テーマの研修講師を依頼した。(チーム責任者であった宮本雅明教授は既に他界されている)

7月15日に光市室積で現地調査と打合せを行い、上記テーマに基づいた昔の室積の写真や新聞記事をパネル化した。

研修内容

24年前(平成3年)を思い出して

- ・「海商通り」と命名し町並み保存の機運が高まる。・平成3年の台風の爪痕が残る。
- ・光市から九州芸工大へ町並み調査依頼あり、調査報告書は町並みの鑑定書である。

都市史から見た室積の特性

- ・1607年:普賢寺領 峨嵋山から海に志向する縦の構造
- ・1661年:早長八幡宮の遷宮 海岸線に平行して連続する町並へ
- ・1731年と1733年:室積大火 大火前の町並みを生かした宝暦(1762年)検地
- ・1763年:撫育方新設、1778年:会所設置 長州藩による町並みの基礎体力づくり
- ・1805年:会所波止の建設 回船業で賑わう町並み 水際の開発

建築史から見た室積の特性

- ・神棚がナカノマにある。2階部に鎬(しのぎ)をきざみ神棚を祀る。
- ・小屋組による屋根の多様性(束立型・登梁型・和小屋型)がある。
- ・アイゴは雨落空間や排水路として公的空間を確保している。大火以前の縦構造の建築を活かした検地の副産物。敷地の一部を供出する地域の共同体の仕組みである。



港町室積のまちづくり

- ・1993年の調査対象は29軒 現存家屋は16軒
- ・伝統的建築物は無理せず住まう。太往生させてあげる、使い切ってあげる。
- ・町並みはみんなで考える。アイゴ(地割)を大切にする。

港町室積の町並みまちづくり その1

伝統的な建築物について

個人の事情に応じて無理せず住まう

必要なのは

**大往生させてあげる。
使い切ってあげる。**
こと

港町室積の町並みまちづくり その2

町並みはみんなで考える

まずは

アイゴ(地割)を大切にする

地割がしっかりしているから町並みのボリュームや密度は大丈夫

安易な公共事業で江戸期から続いたヨコの関係性を崩さない(水と遠くなった失敗を繰り返さない)

質疑応答

- ・災害に対する歴史的建築物の対策は？

大災害については建物より人命が優先だが、平時に調査することで再現が可能に。

- ・大分県の日田市は建物の保全が進んでいるが、どのようにしているのか？

地元の建築屋や設計家が「本物の町を守る会」を結成。伝建地区にも指定されている。建築史によるネットワークの活動が重要である。

- ・報告書は町の鑑定書といわれたが、活用方法はどうか考えられるか？

調査報告書をデジタル化して、市民の目に触れるようになればよい。

また、自分の家屋を建築士に調査してもらっていると、家屋の厚みが増す。



研修会の趣旨説明



150名の参加者



参加者と質疑応答



室積の歴史パネル展示

所感・光市政への反映

- ・伝統的建築物について、大往生(使い切る)ための仕組みづくりが必要！
- ・アイゴや地割りを保全すると共に、活用方法を探る。
- ・調査報告書を市民が活用できるように。(早速、室積支所での閲覧が可能となった)